

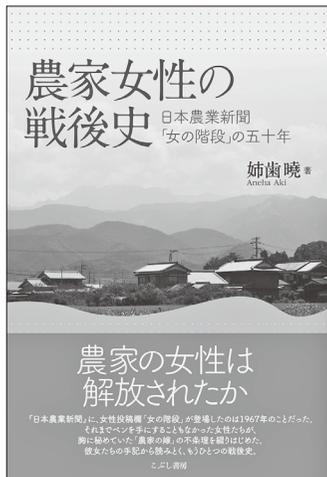
書評

姉齒暁著

『農家女性の戦後史—日本農業新聞「女の階段」の五十年』

(こぶし書房 2018年)

粕谷 美砂子



本書は、1967年に「日本農業新聞」のくらし面に開設された投稿欄「女の階段」への投稿文や1976年から開催されている全国「女の階段」読者の集いの大会手記集「手をつなぐかあちゃんたち」の記録、投稿者たちへのインタビューなどから、「農村の内側からみたリアルな女性史であり、政治史、経済史、農政史、そして生活史そのもの」(p.14)を読み解いた、農家女性の生活の記録である。日刊農業専門誌である「日本農業新聞」の「女の階段」投稿欄は現在も継続されている。著者は、本書の目的を、第1に、上記資料を軸に、描き出されている農家女性たちの思いとその思いを生み出した時代を読み解くこと、第2に、「農家女性が抱

える不条理さ」の根源を探ることであると述べている。

農家女性を対象とした研究は、戦前から戦後に渡って、農村生活の貧困とともに農村女性の惨状が語られてきた。農家の嫁が「角のない牛」と形容されていた時代から現在に至るまで、国際的な潮流との関わりにおいても農家女性の地位は向上したといえよう。しかしながら、農家・非農家を問わず、私たちを取り巻く生活において、男女が共に衡平で平等な人間の尊厳に値する生活を送れているかという点、課題は未だ山積しているのが現状である。

本書第1章「農家女性にとっての『戦後』」では、戦後もなお、農家女性たちの解放を阻んできた根源を考える。第2章「公害と農薬被害の時代」は、高度経済成長の陰で「女の階段」愛読者たちによる農薬表示改善運動の意味を検証している。第3章「戦後食糧増産体制のゆくえ」は、1950年代の農地破壊と減反政策の中で、変わる暮らしの風景と農家女性たちの姿をとりあげ、第4章「総合農政—転作奨励・減反の衝撃」は、総合農政への転換が示す政治的・経済的意味を明らかにしている。第5章「農産物輸入自由化—切り

捨てられていく農業と農家」では、自由貿易と農業の切り捨て、投稿欄から徐々に政治批判が消えていくことを指摘している。第6章「農家女性を追い詰める『日本型福祉社会』」は、家族に押し付けられる介護と減らされる公的福祉サービスによって苦しめられている介護問題を取り上げている。

本書で貫かれている「私たちの世代が体験してきたことは本当に過ぎ去ったことなのか？」(p.80)という塚越アサさん(取材当時93歳)の問いに表されているとおり、著者同様評者も、手記集の一文一文に書かれていることが、「決して過去の出来事ではない」ことを実感する。著者は、本書に描かれているものは、「程度の差こそあれ、今もなお、女性たちを苦しめつ続ける日本社会の宿痾そのものである」(p.283)と述べている。例えば、「臨月でも休むと言えなかった『嫁』の日々」と題してまとめられたインタビューには、働き続けながら子どもを産み育てることに躊躇する今の若い女性たちの想いが重なる。

農家女性の置かれている環境が、さほどその状況が変わってないように思える理由として、著者は、以下の5点をあげている。①零細さを原因とする生産性の低さ、②自営業、なかでも職住が分離されていない農業特有の問題、③土地という私有財産と、これに付随する血筋主義と純血主義の闘争、④体制内への共同化の編成、⑤戦後の農民運動が労働運動から切り離され、農民運動それ自体が弱体化したこと、である。これらを背景として、本書全体を通して迫ってくる、戦後の農家女性にとって未だ変わらず続いている部分と、その時代に付随する特異な部分を紐解きながら読み進めていく本書は、著者の「病巣をかたちづくっているものの正体は何か？」という問いに集約される。ただ、この未だ変わらない部分として重くのしかかることが多い中に、時折、インタビューの言葉に、「今」に続く大きな変化を感じる箇所がある。例えば、農家女性が会合になかなか出られず、出かけるときも肩身の狭い思いをすることがよくあるが、それに対し専業農家の女性であった永井民江さん(93歳)は、「我が家は最初から違っていた。出かけるときも『よう勉強してこい』と送り出してくれた」(p.62)と述べている。「時代の最先端で後継の女性たちをリード」(p.59)してきた「女の階段」第一世代による、息苦しさや苦悩しつつも努力を続けた姿に勇気づけられる。

千葉(2000、86-87)は、農家女性を視野にいれた女性労働研究の必要性を、「単に自営業や農業に従事する女性が多いという理由だけではなく、日本女性の雇用労働における不平等な地位や低い賃金の根拠を明らかにする上で、家族従業者としての農家女性労働を視野に入れることが不可欠」であること、「都市労働者家族の女性労働をめぐる議論」に、「農家女性の働き方を含めて検討することで、女性の多様な働き方についてより包括的な把握が可能になる」点を指摘している。遡って、丸岡秀子は1937年に「農村婦人問題は、婦人問題の原点」であると述べた。そういった意味で本書は、農家・非農家にかかわらず繋がっている問題であること、女性農業者の直面する問題と、都市に生活する女性の直面する問題の共通性と相違性に着目する重要性を考えさせる。

専業農家女性の佐藤洋子さん(69歳)は、「私たち農家は、国民が生きていくための食料を作っているのです。その作り手がいなくなるとは、土地が荒れたりするということを考えていただきたい」(p.208)と述べている。国際連合は、家族農業が、世界の食料安全保障確保と貧困・飢餓撲滅に大きな役割を果たしていることに着目し、2019年～2028年を「家族農業の10年」と定めた。日本においても、農業経営体数約138万経営体(2015年)のうち、家族経営体は農業経営体全体の98%(134万経営体)を占めているのである。EU、米国など他の先進国も同様の状況であり、家族農業の課題は、開発途上国のみならず先進国においても共通の課題である。家族農業経営体は、小規模農業ではあるが、その貢献は大きい。

同時に、農家女性を取り巻く状況は、グローバリゼーションに直面した市場主義化が背景となって変化し、厳しい国際競争力に曝されている。例えば輸出志向型の農業や経営の大規模化という新自由主義的経済政策を背景とした政策の中で、農家女性のおかれている状況を正確に把握することが益々求められている。

本書は、投稿文やインタビューによる農家女性たちの声を、先行研究と関連付けながら丹念に読み解き、上記6つの章に書かれている視点を軸に分析されており、読みごたえがある。しかしながらその一方で、本書に書かれていることが「決して過去の出来事ではない」ものの、現在の若い世代の農家女性たちの新しい動きにつながる進展と課題は何か、疑問が残る点も否めない。農業経済論を基軸に位置付けられている本書であるが、この「女の階段」を用いた生活記録の分析は、関連する学際的な領域においてもさらなる展開が可能であると思われる。

引用文献

千葉悦子(2000)「農家女性労働の再検討」木本喜美子・深澤和子編著『現代日本の女性労働とジェンダー』86-123 ミネルヴァ書房。

(かすや みさこ 生活機構研究科福祉社会研究専攻准教授)